

悩ましいのは、お客様のおもてなしだ。ここに暮らし始めた当初から鳥たちの来訪は楽しみな時間だったが、おもてなしはしないようにしようと妻と話していた。餌をあげることで人の手に依存してしまいはしないか。そうなる私たちが死んだ後、生きていくのが大変にならないかということを実剣に話していた。ところが最初の冬の正月二日に窓の外を見ると、木にリンゴがなっているのではない。同じ仲間とはいえずミの木にリンゴができるはずがない。妻の言葉だ。あれだけおもてなしはしないでおこうと言っていた本人が、ヒヨドリ可愛さに負けてしまったようだ。もともとは自然豊かな環境に暮らして苦労しながらも食べ物には恵まれていたのが、人が木を切り造成して住み始めたことで食べ物が減ってきた。その分をおかえししなければ。それに、近所は皆餌台を置いたり脂身を吊るしたりしているのに、うちだけ我慢しても意味がない。というのが理屈のようだ。一週間後には窓の前に小さな箱が置いてあってヒマワリのタネが入っていた。当然、ヒヨドリはやってくるし、シジュウカラやアカゲラ、ゴジュウカラなどの小鳥が次々とやってくる。早朝に窓際にやってきていた鳥も、最初は「もう起きませんか。大丈夫ですか。」と言っていたのが、小首をかしげて「ご飯はまだですか。」と言うようになってしまった。翌年には、あり合わせの木材で立派な餌台もできてしまった。作ったのは私だが。餌台は木の枝を使ったりできるだけ自然の状態に近づけてみた。例えば、アカゲラなどのキツツキの仲間が脂身が好きだが、少し太い木の枝に横から穴を空けてそこに脂身を詰めるようにしてみた。キツツキが木に穴を空けて中にいる虫を食べるのに近くしたのだ。とは言っても自己満足的免罪符にすぎないのだけれど。ただ、ひとつだけ絶対守るルールを妻と決めた。それは、雪が解けて土が出てきたら餌台は仕舞うということだ。

鳥さんたちが来てくれるのにはもう一つ悩みがあった。鳥の子供達が飛び始めるころになると、中には窓を知らずに激突してしまうのがある。バードストライクだ。窓のガラス面は角度によっては良く外の風景を反射して鏡のようになることがある。そこにあたかも広い空間が広がって森につながっているように見えてしまうのだ。幸い、我が家に激突した鳥たちは脳震盪を起こしてしばらくじっとしていることはあっても、そのうち飛び立っていつてくれた。ただ、隣人たちの話を聞くと、毎年のように亡くなる鳥がいるという。これは、明らかに後から家を建てて危険な状態をつくった私たちの責任なのだが、いろいろ調べても有効な対策が見つからなかった。良くタカなどの小鳥の天敵のシルエットをシールにして窓に貼るのを売っているが、効果は薄いみたいだ。

風車をたくさん作って窓の前に置いてみたり、蛍光色のテープをたらしてみたり、いろいろ試したが我が家の見かけが悪くなるばかりで効果はなかった。あるとき窓の西日対策に簾をつけてみたら、内側からの眺めもそう悪く無かった。そして鳥たちががぶつかっても簾がクッションになって大ごとにはならない。なので我が家は冬も簾がかけっぱなしの変な家になっている。

